

アフリカン・アメリカンの名前のフォークロア： *Song of Solomon* を手がかりとして

峯 真依子

はじめに

アフリカン・アメリカンの文学作品には、登場人物の特徴を象徴的に表す名前¹が多く用いられる。それらの名前は、ユニークで奇妙でもあるが、物語の中で実に言い得て妙であり、人物の特徴をとともよく表している。また、黒人作家らによる名前に対するこだわりは、以下の作品を並べてみるだけでも十分推し量ることができる。²

Bigger Thomas という名前に、主人公の願いがこめられているかのような Richard Wright の *Native Son*、主人公の名前が無い Ralph Ellison の *Invisible Man*、そして圧巻なまでの分量で地名や名前が登場する Toni Morrison の *Song of Solomon*、近年では Toni Cade Bambara, Gloria Naylor らの作品にも名前に意味を持たせる手法がみられる (Burelbach 248)。その他、James Baldwin の *Nobody Knows My Name* があり、マルコム X の名前の X の逸話なども添えることができよう (Heller 4)。

Dunn & Morris は、作家は「いかに名前が人物を定義し、制限するか、また名付ける行為が、いかなる作品の物語的な戦略においても、実に重要な部分となり得ることに、極めて自覚的である」(24) と述べている。たとえばエリスンの『見えない人間』の Dr. Bledsoe は、音だけを聞けば bleed の過去形の bled に so、「とても血を流した」という意味にもとれる。しかし、

誰の血が流れたのかは明示されない。それが本人の血か、同胞の血か（もしくはどちらもか）、その解釈は読者に委ねられることになる。人物の名前は、明らかに「作品のプロットを先取的に決定する行為」(Dunn & Morris 28-9)でもあるが、複層的な読みをもたらしているといえる。

しかし、これまでアフリカン・アメリカンの作品に表れる名前は、その印象の強さと、複雑さに反し、十分に検証されてこなかったのではないか。もちろん、名前が作品の中で、ある役割を担っているのは、アフリカン・アメリカン文学だけではない。しかし、アフリカン・アメリカン文学と名前の関係を特別に取り上げなければならないのは、名前の問題がテキストの中だけで論じることができない程、その問題が奥深く作家の中に根を下ろしているからである。それはモリスンがトニ・モリスンになるまでに幾度か名前を変えていること、またエリスンが『影と行為』において「隠された名前と複雑な運命」という節を設けなければならなかったことと決して無縁ではない。

そこで本論では、アフリカン・アメリカンと名前という、看過できない問題を取り上げて、次のことを明らかにしたい。まず、なぜアフリカン・アメリカンの作家は、ユニークで奇妙な名前を登場人物に名づけるのか。次に、彼らを他の文学と分かつ大きな特徴のひとつといってもよい名前の特異さは、果たしてどこにその歴史的な背景や、思想的な源泉を求められるのか、ということである。

その際に着目しなければならないのが、風呂本の先駆的研究、『黒人文学とフォークロア』の視点である。風呂本は、様々なフォークロアと文学作品との関係を多角的に論じるが、そこを通奏するのは、「黒人文学の中に過去からつながる流れ」(iii)として理解されるフォークロアである。つまり、風呂本が提示したフォークロアとは単なる過去ではない。作品と作家に導かれ、読者の前に立ち現れる過去である。そしてこの名前にも、「過去からつながる流れ」があるのではないか。本論ではそのような流れの中で、名前というフォークロアを提示したいと考えている。そしてそれを名前のフォークロア、つまり *namelore* と名づけて論じたい。

1. *Song of Solomon* における名前

多くの独創的な「名前」が用いられてきたアフリカン・アメリカン文学であるが、圧巻なのは、トニ・モリスンの *Song of Solomon* である。この作品でまず印象的な名前は、通りの名前である（木内・森 90）。Mains Avenue は、黒人たちに Doctor Street と呼ばれている。それは医師として町で最初の重要な黒人となった、Milkman (Macon Dead 3 世) の母方の祖父にちなんで、そんな呼び名がついた経緯を持つ。文字通り、それは通り名であったはずなのだが、やがて郵便制度や徴兵制度などの公の場で使用されることとなる。

事態を重く見た市議員たちによって、「ここは『ドクター・ストリート』ではない (not Doctor Street)」と、名称の使用が禁止されると、自分たちの「思い出を生き生きと保ち、しかも市議員たちをも満足させる方法を発見」(4) して、今度は Not Doctor Street と呼ぶようになる。この通りの名の面白さは、今後さらに市議員たちによって禁止の掲示が仮に出たとしても、おそらく彼らはさらに Not-Not Doctor Street と名称を変えて呼ぶようになるのではないかと、そんな示唆を含む点にある。

たとえば Moraru は、モリスンの登場人物が「再び名づけたり、かつ（もしくは）すでに名づけられたものを再び定義し直すことで、名前をつけることに対する特別な価値観、自由という本質をもたらす」(198) ことを指摘するのだが、Doctor Street/Not Doctor Street のような「再び名づける (rename)」(Moraru 193) 行為においては、面従腹背的で、したたかな性質の自由がもたらされているといえるだろう。

一方、Macon Dead という 3 代にわたる奇妙な名前の始まりはこうである。Milkman の父方の祖父は、1869 年の奴隷解放後、自由民局に登録に行く。生まれはメイコン、親父は死んだと告げたが、記入する欄を、泥酔状態の白人が間違っしてしまい、彼は Macon Dead という名前で登録されてしまう (53)。このエピソードには「机」が出てくる。つまり、机の向こう側の白人が、こちら側の黒人の名前を握っていることを机は象徴する。

意外なことに Milkman の祖母は、次のような反応をする。Milkman の父親 Macon Dead 2 世は回想する。「ママが気に入ったんだ。その名前が好きになったんだ。新しく過去を拭い去ると言うんだ。何もかも一切を拭い去ると」(54)。彼らはむしろ、名前もしくは言葉の力によって過去を“Dead”させようとしたのであり、それは白人から与えられた Dead という姓を、まったく新たな文脈に定義し直そうとする行為だったともいえる。

しかし、Milkman の祖母は Pilot の出産で早くに命を落とし、Milkman の祖父も Milkman の父親が 12 歳の頃に、字が読めないゆえに白人に騙されて土地を奪われ、殺されてしまい、いわば Dead という名前を自己成就してしまう。そこに、モリスンの名前(言葉)の怖さがある。たとえば、*Sula* では、白人/メキシコ系/黒人の三人の子供が Dewey という同じ名前で育てられたが、初めは別の容姿だったにも関わらず、時間がたつとまったく同じ姿と心と声を持つようになり見分けがつかなくなった。あたかも言葉とは、単なる記号ではなく、むしろ言葉が実体を生み出すと作家が考えているかのようである。

また、もうひとつ、名前に関する重要な描写がある。親友の Guitar が尋ねる。

「何で困ってるんだ？ 自分の名前が気に入らないのか？」

「ああ」Milkman は仕切り席の背中に、倒れるようにして頭を押し当てた。「ああ、俺は自分の名前が気に食わない」

「言っておくけど、なあ、お前。黒ん坊は他のすべてのものを手に入れるのと同じ仕方、自分の名前も手に入れるんだ——精いっぱい仕方な。精いっぱいの」

Milkman の眼は今やかすんでおり、言葉もそうだった。

「どうして俺たちはちゃんとした仕方、ものを手に入れることができないんだ？」(*Song of Solomon* 88)

名前ということについてモリスンは、「……いわば黒人は孤児みたいなも

ので、親や祖先を求めて探しているという意味において、名前はいっそう重要な意味を持つのです」(*Nimrod* 44)と述べているが、過去とのつながりを断絶させられた経験を持つアフリカン・アメリカンにとって、名前とは自らの歴史をたどる手がかりでもあろう。しかも彼らは、白人から奴隷の名前をつけられたことがあるという、名前の自己否定から始めなければならない。

たとえば MacKethan は、この作品では、黒人文学の中心的な伝統である Slave Narratives のように、名前と名づけのモチーフが強調されていることを指摘する。また、黒人の名前の核心にあるのは「アイデンティティの探求」(200)だと言う。たしかに数多くの Slave Narratives では、奴隷は自由になるときに、新しい名前に変える。それを Benston は「自己意識の再洗礼」(152)と呼ぶ。たとえばそれは、元逃亡奴隷であり、後に説教師となった Sojourner Truth の改名など、枚挙にいとまがない。

自分の「精いっぱいの」思いを、名前というわずかな数語に凝縮させた彼らの名前は、アフリカン・アメリカン文学において「完全に自由のメタファー」(Moraru 200)として作用してきたことがわかる。そして、名前を部分的に作り替える、再び名づける、名前の言葉の意味の定義を変える。試行錯誤を繰り返しながら、自分の「本当の名前」を探す。そのようなながきの途中経過のような名前も、挫折の多い「自由のメタファー」として作用しているのである。

さらには、作品の最後において、名前そのものが、以下のように長大に羅列される。

Macon Dead, Sing Byrd, Crowell Byrd, Pilate, Reba, Hagar, Magdalene, First Corinthians, Milkman, Guitar, Railroad Tommy, Hospital Tommy, Empire State (この男はただぼんやり突っ立って、揺れているのだった), Small Boy, Sweet, Circe, Moon, Nero, Humpty-Dumpty, Blue Boy, Scandinavia, Quack-Quack, Jericho, Spoonbread, Ice Man, Dough Belly, Rocky River, Gray Eye, Cock-a-Doodle-Do, Cool Breeze, Muddy Waters, Pinetop, Jelly Roll, Fats, Lead-belly, Bo Diddley, Cat-Iron, Peg-Leg, Son, Shortstuff, Smoky Babe, Funny

Papa, Bukka, Pink, Bull Moose, B.B., T-Bone, Black Ace, Lemon, Washboard, Gatemouth, Cleanhead, Tampa Red, Juke Boy, Shine, Staggerlee, Jim the Devil, Fuck-Up, and *Dat Nigger*.

(*Song of Solomon* 330)

「Milkman は眼を閉じて……黒人たちのことを思い出した。彼らの名前を。憧れや、身振りや、欠点や、事件や、間違いや、弱さからつけられた名前を。それらの名前はさまざまなことを証言していた」(330)。つまり、最後に思い出されたのは、人々の顔でもなく、声でもなく、たくさんの名前であった。そして私たちは、名前が「さまざまなことを証言していた」という箇所を、根本的に検証する必要があるだろう。

2. アフリカン・アメリカンの名前の変遷

アフリカン・アメリカンの名前は、歴史的にどのような変遷をたどってきたのだろうか。これまでに黒人の名前に関して広範囲にわたる研究をしてきたのは、Puckett と Heller である。そこで Puckett が蒐集した、1619 年から 1940 年代中頃までの黒人の名前 34 万人分の資料（1975 年に Heller によって 1930 年代までが明らかにされた）の一部と、Puckett の論文を中心に見ていきたい。

まず、初期の 1600 年代であるが、1700 年以前では 65 人の奴隷の名前が残っている。1619 年、ヴァージニアに最初につれて来られた黒人奴隷³の記録には、3 人の Anthony、2 人の John、そして Angelo, Isabella, William, Frances, Edward そして Margaret がいた。しかし Angelo などは一般的な名前ではなく、残りの名前もスペイン語名を英語的に直したと思われるため、Heller は「1700 年以前には、植民地につれてこられた奴隷のうち大半がスペイン語名だった可能性が極めて高い」と結論づけている (6-7)。

Puckett の論文によれば、18 世紀のルイジアナを除く場所に住む 603 人の奴隷のうち、15% がフランス、スペイン語などの外国名であったという。しかし 19 世紀にはそれが 1% 以下に下がる。さらに興味深いのは、アフリ

カンとネイティブ・アメリカンの名前（両者の内訳は不明）を名乗る黒人奴隷が、合わせて 13% だったことである。しかし 19 世紀になると同様に 1% 以下に下がる (37-8)。このことから 18 世紀の奴隷の周囲には、民族が様々に関係していたことがわかる。

1700 年から 1800 年の奴隷の名前から、他にどのようなことがわかるだろうか。Heller によって分析されたデータによると、ルイジアナを除いた奴隷の男性 962 人と、自由黒人の男性 763 人を比較したところ、奴隷の男性に最も多かった名前は Jack 57 人、Tom 47 人、Harry 34 人などの名で、全奴隷の男性中 14.3% を占めた。一方、自由黒人の間で Jack, Tom, Harry の名前の使用頻度は低く、このことから、自由黒人は奴隷に多い名前を避ける傾向があったことが伺えるという (8-10)。

また、1700-1800 年の間で着目すべきことは、独立戦争に参加した黒人兵士の 118 人の名前であろう。彼らの姓をみていくと、最も多い姓から順に Freeman 7 人、Johnson 4 人、Brown 3 人、Greene 3 人、Rogers 3 人、Ball 2 人、Caesar 2 人、Jackson 2 人、Liberty 2 人……と続いている。つまり Freeman と Liberty の姓の使用が 118 人中 7.6% を占めることから、この 2 つの姓には、アメリカにおける自由黒人の達成した、独自の地位が表現されていると、Heller は述べている (10)。

1800 年から 1864 年の間は、Heller によれば、「多くの奴隷たちの名前が、黒人自身によって発展した」時期である (41-2)。そこで、14,177 人の南部の奴隷と 13,356 人の南部の自由黒人の名前が、特異な名 (unusual name) をめぐって比較検証された。結果は、奴隷の男性で特異な名を持つ者は 735 人 (9.52% / 7,705 人)、奴隷の女性は 635 人 (9.79% / 6,472 人)、自由黒人の男性は 1,396 人 (16.10% / 8,668 人)、自由黒人の女性は 1,046 人 (22.31% / 4,688 人) となった (Heller 41, 54-5)。したがって、自分で名前を自由につけられる自由黒人の方が、名の非凡さの割合が高いと推察されるため、この時期は、やはり名前の創意工夫が、活発になったと考えてよいのではないだろうか。

ところで特異な名とは、白人の名前を基準にした場合、そこから逸脱し

た名前と理解してよい。たとえば1800年から1860年の間の南部の自由黒人の名をとりあげると、Bacchus, Bird, Church, Cold, Cuffey, Doctor, Dolphin, Eden, French, George Washington (ファーストネーム), Happy, Julius Caesar, King, London, Nero, Pleasant, Reason など、後述するパターンに当てはまるものと、意味も命名の意図も不明であり、語源が広範囲に及びパターン化が困難な、Burgoine, Donum, Johia, Lenn などの名がある (Heller 100-1)。

南北戦争後は、国勢調査部の資料も組み込みながら、南部のいくつかの都市を取り上げ、また時代区分を1877, 1899, 1919, 1937年までの約20年ごととして、黒人と白人の名前の比較調査がなされているが (Heller 133-40, 143-5, 147-50, 152-5)、ここで論じるにはあまりに範囲が大規模であるため、概略にとどめたい。全時代区分を通じ、白人よりも黒人が、黒人男性よりも黒人女性の方が独創的な名前を名乗った。たとえばGeorgia州Augustaの1937年の資料によれば、黒人女性のうち特異な名前を持つ人の割合が7.6%、黒人男性は6.6%だったという (Heller 155)。

しかし、高等教育を受ける者の名前では、1935年に大学に入学したこの時代の黒人に、白人と変わらない名を使用する傾向がみられ、白人的価値体系のある側面に対して、ひきつけられていたことを裏付けるものだ、とHellerは結んでいる (305-6)。Hellerが明らかにしたのは1940年代半ばまでの資料のうち、1930年代までである。さらなる検討対象としては、1960年代のブラック・ムスリムの影響下の改名が (Muhammad Aliのように)、実際にどれくらい進んだのか、そして現代における名前のアフリカ化の傾向が検証される必要があるだろう。

3 アフリカン・アメリカンの名前の類型

奴隷の特異な名は、大きく10種類ほどに分けられる。また、奴隷だけでなく、自由黒人や、20世紀初めの黒人の名にも同様に、以下のパターンによる名は確認されるという。①アフリカの・曜日の名 (African/ Day

names)、②短縮型 (Diminutive)、③描写的・エピソード的 (Descriptive/Episodic)、④記録としての名前 (Record Keeping)、⑤古典・文学 (Classical/Literary)、⑥敬称 (Titular)、⑦愛称 (Pet Name)、⑧有名人の名前 (Famous)、⑨聖書、清教徒的 (Biblical/Puritanical) である (Puckett 38-42, 45-6; Heller 48-54)。

まず、もっとも有名な名前は、Cudjo, Cuffee などの①曜日の名⁴である。これはアフリカの伝統的な命名習慣にもとづいており、子供が生まれた曜日に従ってつけられる (Puckett 38)。*Song of Solomon* には、①曜日の名が一見そうとはわからない形で表れる。Guitar の入っている暗殺集団は、もしも月曜日に黒人が1人殺されれば、「月曜日の男」なる者が白人を1人無差別に報復行為として殺害する。作品の主な舞台は1960年代、すなわち、人種的政治状況から「急進的な名づけが沸き上がった……ヨーロッパの形式を退け、アフリカ的な名前を用いた」(Rosenberg 219) 時代である。それに対する皮肉として、モリスンは、このようなアフリカ式の命名習慣を取り入れたとはいえないだろうか。

ところでエリソンは、ブラック・ムスリムを中心に起きた改名について「私たちの一部には……激情に駆られて、血にまみれ残忍で罪深いといった過去の印象を拒否しようと、生まれながらの名前を捨ててしまう人たちがいます」と述べ、改名はかえって、自分たちに何が起きたのかを隠蔽してしまうと危惧する (『影と行為』170)。

さて、②の短縮型の名前は、Cy, Gin など主人の都合で「呼びやすい名」として奴隷に与えられた名だった。Puckettによれば、この短い名は奴隷の名前であるため、かつての自由黒人には避けられる傾向があったものの、20世紀初めには、逆に増えてきているという (38-9)。現代の音楽シーンでは、ヒップ・ホップ系にこの短縮型の名が見られる。モリスン作品では、*Beloved* の Paul A, Paul D が相当する。

③描写的・エピソード的な名 (Heller 52) は、Fat Man や Polite, Cold や Moaning, Handsome や Busy (Puckett 40) といった、外見的特徴や、個人の個性が描写され、何か個人に起きたエピソードをもとにつけられた

比較的分かりやすい名である。たとえば *Song of Solomon* では、Railroad Tommy, Hospital Tommy, Empire State, Small Boy, Blue Boy, Ice Man, Gray Eye, Cool Breeze, Juke Boy, Shine, Pink などがこれに相当し、Milkm-an や Guitar の名もエピソード的な名といえるであろう。

しかしこの種類の名は、成長途中で名づけられるニックネームに近いのではないか。ところが Puckett は「ニックネームはすべての集団に表れるが、奴隷たちのものは、それが公式の名を表す傾向が多かった……多くの現代の黒人は……ニックネームが恒久的な名前になる傾向がある」(39) と指摘しており、ニックネームと本名の境界線の曖昧さは実に興味深い。彼らのような名前のあり方から、逆に日本のように戸籍制度のもとでひとつの名前しかない状態とはどういうことなのかという問いも、自然に立てられるだろう。

④記録としての名は、生まれた日時や場所などが記録されている。日時は April, January, Easter などで、場所は Alabama, Baltimore などの出身地の他、York や London などの外国の名を子供につけた奴隷もいたが、プランテーションの近くの港に停泊する、船の目的地だったという (Puckett 40)。つまり、これらの行為は、読み書きが禁止されていた奴隷にとっては記憶を保存する手段だったといえる。作品中には、Scandinavia, Rocky River という名がある。

⑤古典・文学の名は、Caesar, Pompey, Jupiter などである。ダンクリングはこの命名法を「奴隷所有者が薄気味悪いユーモア感覚を持っていたり、自分の教養を誇示」していたと解釈する (193)。*Song of Solomon* では、Nero (ネロ皇帝) の名が用いられていたが、名将ではなく暴君であるところに、モリスンのユーモアが表れているといえるだろう。次の⑥敬称は、その下に何か別の名が続くのではなく、単独で Doctor, General, King である。20世紀初めにも存在した (Puckett 41)。

⑦愛称は、もともと奴隷や自由黒人がプライベートで呼んでいた呼び名であり、公的記録には残っていないが、Puckett はこの名に注目する。奴隷の名として Sis や Toy、南部の自由黒人に限って Bud や Darling が表れるといい、もちろん白人の主人がこの名を用いて彼らと呼ぶことはない。現代に入って

からは、たとえば Precious や Baby, Sweet といった名が、外の世界（一般的に）に知られるようになった (42)。*Song of Solomon* では Sweet、また Smoky Babe であろう。他に、*Beloved* では、Baby Suggs が挙げられる。

⑧有名人の名は、歴代の大統領の名や、黒人指導者にあやかっただけの名のことである。Heller も Puckett も考察の対象としているが、このあやかり名はどこにでもあると考えられ、特異な名前というには、まだ議論の余地があると思われる。*Song of Solomon* の中では、以下の通りである。

... Muddy Waters, Pinetop (Pinetop Perkins), Jelly Roll (Ferdinand "Jelly Roll" Morton), Fats (Fats Domino), Leadbelly (Lead Belly), Bo Diddley, Cat-Iron, Peg-Leg (次の Son とセットで Peg leg sam), Son, Shortstuff (Big Joe Williams & Short Stuff Macon の意味だろうか), Smoky Babe, Funny Papa (Funny Papa Smith), Bukka (Bukka White), Bull Moose (Bull Moose Jackson), B.B. (B. B. King), T-Bone (T-Bone Walker), Black Ace, Lemon (Blind Lemon Jefferson), Washboard (The Washboard Rhythm Kings もしくは Zydeco などの演奏で使われる洗濯板状の楽器), Gatemouth (Louis Armstrong もしくは Clarence "Gatemouth" Brown), Cleanhead (Eddie Vinson), Tampa Red . . .

(330)

以上がブルース、ジャズ、カントリー、フォークロック、ロックンロール、R&B のミュージシャンからの引用であると考えられる。他の有名人の引用としては「... Staggerlee, Jim the Devil, Fuck-Up, and *Dat Nigger*。」(330) であろう。4つの名を声に出して読むと文になる。「Staggerlee (Stagger Lee = 19世紀末の黒人の犯罪者)、Jim the Devil (畜生のクロンボウめ)、Fuck-Up (くそつたれ) and *Dat Nigger*。 (つまり、あいつだ)」となる。

さて、上記と同様に、⑨の聖書の名前もどこにでもあるといえるが、ただ *Song of Solomon* での読み書きのできない父親に、字の形の印象で選ばれた Pilot (ピラト/パイロット)、意味を重視せず聖書からでたらめに選ばれた First Corinthians (コリント人への第一の手紙)、Magdalene (マグダラの

マリア)といった「名前の無作為抽出 (blind selection of names)」(Moraru 196)による名づけには、注目すべき点があるのではないか。ランダムに指でたどって聖書から名前を選ぶのは、作家の母方の家の命名法であったという (Rosenberg 215)。一見、でたらしめに見える名づけ方だが、神に命名権を譲渡しているとも考えられる。

Heller は、黒人の特異な名前を次のように結論づける。「人間の持つ最も興味深く、ユーモアのある手段の一つは、世界に対して、自分がユニークな存在であることを、あれこれ考えた末、集団の是認に公然と反抗する名前を選ぶことによって表明する手段を編み出してきたことである…特異な名前は、私たちが通常見ている人生の厳粛さに対して、少し冷笑的で、しばしば必要とされる解毒剤を与えてくれる。それらは面白いのである。そういった名前は、ユーモアのセンスやバランス感覚の証だ。そして機智やバイタリティや想像力が反映されている。すべての人々のための遺産なのである」と (Heller 310)。

以上のように名のパターンを見て来たが、姓と組み合わせることで、さらに複雑な意味を持たせた名前もある (Puckett 44; Heller 330-1)。エリソンが「黒人の社会があだ名を付けたり、嘲笑を誘うようなありえない名前や馬鹿げた振る舞いを見分けたりする能力という点では、随一だということです」(『影と行為』172)と述べたように、以下のような名前は、姓と名の組み合わせの妙であり、それは彼らの独壇場といえるであろう。

… Thinkie Black (考える黒人) … Undine Salad (振る舞われないサラダ), Pleasure Bird (喜びの鳥) … Good Price (良い値) … Pink Green (ピンクで緑で), Wash Saturday (土曜には風呂に入れよ、翌日は日曜礼拝だからか?), Golden Day (全盛時代) … Rolling Church (転がる教会), Moses Law (モーセの十戒) … Butter Still (バターはまだあるよ), Asia Minor (アジアは少数派), More Payne (よりいっそうの痛み) … Alice Self Boss (アリス 自分自身のボス) … (Heller 310)

さらに、アフリカン・アメリカンの名前の問題について、個人に焦点を当てて考察してみたい。

4. 物語を語る名前

Song of Solomon に出てくる名前のひとつに、このような名前がある。

「エンパイア・ステイト？」

「そうだよ、エンパイア・ステイトだよ」

「エンパイア・ステイトと走り回ったりする者はいないよ。あいつはばかだ。あいつはただ、ほうきを持ってその辺に突っ立って、よだれを垂らしているだけさ。口さえきけないんだぜ」

「きかないんだ。だからといって、きけないというわけじゃない。ただずっと昔、女房が別の男と寝ているのを見つけたら、口をきかなくなったというだけなんだ。それ以来話すことがなくなったんだ」(110)

妻に浮気をされて以来、高層ビル Empire State Building が風で揺れるかのような呆然と放心したままの哀れな姿が、名前と名前のエピソードに表されている。そして、このエピソードから推測されることは、彼が「なぜそんな名前になったか」という原因がまずあり、その結果が名前に表現されていることである。実はアフリカン・アメリカンの面白い名前とは、その構造に「原因と結果」の物語を持ち合わせているのではないだろうか。

そのことを確かめるために、資料を紐解いてみたい。以下は、1930年代に、生存中の元奴隷に対して行われた Federal Writer's Project (連邦作家計画) のインタビューのうち、自分の名前について語った人の話である。

Yach Stringfellow

おれは1847年5月の生まれ、そんで、つぎの5月で90歳になる。おれはテキサスの Washington 郡 Brenham で生まれた。おれの主人と

奥様は、Frank と Sarah Ann Hubert っていった。おれの親父はアフリカ出身で背が高く、まっすぐで、矢のようだったね。親父はある男に売られて、そいつがカルフォルニアに連れて行っちゃったんだ、49年のゴールドラッシュの時のことだった。おれとおふくろは Hubert 旦那のところに居た。そいつが理由で、おれの名前は他の奴隷みたいに、主人のと同じじゃないんだ。

頭んなかさが悲惨なことになっちゃってね、思うように思い出せねえや。おれには兄弟や姉妹があんまりいなくてね、つまり、身内の連中がいな (no Stringfellow kinfolks) ってことよ。家族のメンバーはもう何人かはいたんだけど、みんな別の名前だった、Sally とか Joe とか Tom っていう。

※ Texas で収録

(Rawick, Supplement-2, vol. 9, part 8, 3748) (下線部は峯)

Stringfellow は父親が不在であり、よって兄弟姉妹もできなかったという。つまり自分の「String Fellow (仲間) がいな」ことが、この名前 (姓) に表された。次も見たい。

Railroad Dockery

Railroad Dockery、そいつが私の名前ね。John Dockery さんのとこの奴隷でしてね、私らはアーカンソーの Lamertine に住んでいて、そこで私が生まれたんです。私の母親の名前は Martha、私は四つ子でしたよ、3人が女、1人が男、で、その男の子が私だったというわけなんです。Red River, Ouachita, Mississippi そして Railroad が、私らの名前でした……John Dockery さんは、アーカンソーで最初に建設が予定された Mississippi, Red River, Ouachita Railroad の社長でしてね。それで、四つ子が生まれたってのが、うちの監督官 (director = 奴隷を管理する人) の耳に入ったんです、彼ら (主人の家族) が鉄道にちなんだ名前をつけて欲しいと望みましてね、そういうことになったんです……

Red River と Ouachita は小っちゃいときに死にましてね、Mississippi と Railroad が育ちましたよ。まあそういったことは、母から聞いたんですけど。Mississippi は5、6年前に死にましてね、唯一残っているのが、この私ってわけなんです。

※ 81 歳、1103 Short 13th, Pine Bluff, Arkansas で収録、本人の住所 (Rawick, vol. 8, part 2, 164) (括弧内は峯)

これらは資料のほんの一部にすぎない。しかし、以上のことからわかるのは、彼らの名前の構造には、なぜ彼が今の名前になったのかという個人史が想起される特徴があることである。またそれは、紙に書かれ、放置され、時間とともに忘れられていくものではなく、名前が人々の口の端にのぼるたびに、個人の人生の物語が再び息を吹きかえすような、名前という短くとも、豊かな口承の物語でもあるのだ。

おわりに

本論では、登場人物の名前が特徴的であるアフリカン・アメリカンの文学作品の中でも、とくに *Song of Solomon* の名前に着目し、そこからアフリカン・アメリカンの名前を検証した。1章で作品における名前を考察し、2、3章で名前の変遷と類型化によって、彼らの名前に隠された歴史と意味を読み解くことで、作品の中の名前がどのような背景を持つか意味づけを行った。また4章では、元奴隷のインタビューから個人と名前の結びつきに焦点を当てた。

結論としていえることは、アフリカン・アメリカン作家が名前を作品で強調してきたのは、彼らの名前がアメリカにおける自由を長い間求めてやまなかった、民族の集団的な歴史を語っているからであり、また同時に短い個人の一生の物語をも語っているからである。その両義性を持つ名前であるからこそ、面白い名前とはある意味、過剰でもあり、そして強烈な個性を放つといえる。それゆえに、*Song of Solomon* における膨大な名前のように、彼

らの名前は語られる価値がある。いや、作家が名前を語るのではなく、名前 (name) が雄弁に自己 (の lore) を語り始めるのだ。

註

- 1 「名」は first name, given name, 「姓」は last name, surname, family name とした。「名前」name は姓と名の全体を指す場合と、個人を象徴するような抽象度の高い意味としても使用した。「ニックネーム」nickname は通り名、異名の意味で用いた。
- 2 Burelback は、Zora Neale Hurston と Alice Walker は、他の黒人文学のような名前を避け、名前が解釈されることの暴力から無縁であろうとしたと論じる (260)。
- 3 厳密にいて、彼らは法的には奴隷ではなく、年期奉公人であったという説の方が一般的である。Franklin, John Hope, *From Slavery to Freedom*. New York: McGraw-Hill, 56.
- 4 Georgia Writers' Project. *Drums and Shadows: Survival Studies among the Georgia Coastal Negroes*. Georgia: The U of Georgia P, 1986. には、この命名法にもとづいた、Friday, Satdy, Toosdy など Day names への言及が多くある。(xi, 51, 87, 156, 209-10)

Song of Solomon は邦訳を参照し、一部変更を加えた。

引用・参考文献

- 阿部珠理「名前は語る——アメリカ先住民の名づけ」『言語：特集——名前の言語学』第34巻、大修館、2005年：66-8。
- Baldwin, James. *Nobody Knows My Name*. New York: Dell Publishing, 1961.
- Benston, Kimberly W. "I Yam What I Am: The Topos of (Un) naming in Afro-American Literature." *Black Literature and Literary Theory*. Ed. Henry Louis Gates, Jr. New York: Methuen, 1984. 151-72.
- Burelback, Frederick M. "Naming and a Black Woman's Aesthetic." *Names*. 41.4 (1993): 248-61.
- ダンクリング、レスリー・アラン『データで読む英米人名大百科——名前の榮枯盛衰』中村匡克訳、南雲堂、1987年。
- Dunn, Margaret M. & Morris, Ann R. "The Narrator as Nomenclator: Narrative Strategy Through Naming." *The CEA Critic*. 46 (1983-84): 24-9.

- Ellison, Ralph. *Invisible Man*. New York: Vintage, 1980. 『見えない人間 I・II』松本昇訳、南雲堂フェニックス、2004年。
- エリソン、ラルフ『影と行為』行方均／松本昇／松本一裕／山崎文男訳、南雲堂フェニックス、2009年。
- 風呂本惇子『アメリカ黒人文学とフォークロア』山口書店、1986年。
- Heller, Murray. *Black Name in America: Origins and Usage*. Boston: G. K. Hall, 1975.
- 木内徹・森あおい『現代作家ガイド4 トニ・モリスン』彩流社、2000年。
- 小谷耕二『自伝のエクリチュールと黒人の自己形成に関する文化史的研究』(課題番号 15520186) 平成 15-17 年度科学研究費補助金基盤研究 (c)、2006年。
- MacKethan, Lucinda H. "Names to Bear Witness: The Theme and Tradition of Naming in Toni Morrison's *Song of Solomon*." *The CEA Critic*. 49 (1986): 199-207.
- 峯真依子「スーラという異端の鳥——モリスンによる空の視点」松本昇・西垣内磨留美・山本伸編『バード・イメージ——鳥のアメリカ文学』金星堂、2010年：123-39。
- 「黒人奴隷と自由の帰趨」『九州大学比較社会文化研究』21号、2007年：83-96。
- Moraru, Christian. "Reading the Onomastic Text: 'The Politics of the Proper Name' in Toni Morrison's *Song of Solomon*." *Names*. 44.3 (1996): 189-204.
- Morrison, Toni. *Beloved*. New York: Vintage Books, 1987, 2004.
- . "Interview with Toni Morrison, by Pepsi Charles." *Nimrod*. 21/22 (1977): 43-51.
- . *Song of Solomon*. New York: Vintage Books, 1977, 2004. 『ソロモンの歌』金田真澄訳、早川書房、1994年。
- . *Sula*. New York: Vintage Books, 1973, 2004.
- Puckett, Newbell N. "American Negro Names." *The Journal of Negro History*. 23.1 (1938): 35-48.
- Rawick, George P. *The American Slave: A Composite Autobiography*. Westport: Greenwood Publishing Company, 1972.
- Rawick, George P. *The American Slave: A Composite Autobiography*. Supplement, Westport: Greenwood Publishing Company, 1977.
- Rosenberg, Ruth. "'And the Children May Know Their Names': Toni Morrison's *Song of Solomon*." *Names in Literature*. Ed. Grace Alvarez-Altman and Frederick M. Burelback. Lanham: UP of America, 1987. 215-25.

African-American Namelore: Focusing on *Song of Solomon*

MINE Maiko

In African-American literature we often find an emphasis on unusual black names. Among them, Toni Morrison's *Song of Solomon* is especially striking with its abundance of unique names. In addition, one character's search for his real name transforms him into a new person, from the name of Milkman to that of Solomon. Solomon, formerly Milkman, develops the ability to leap as if he had acquired the capability of flight just as his great-grandfather Solomon had. In a sense it is no exaggeration to say that *Song of Solomon* is a story about the importance of names and naming. According to MacKethan, emphasizing names and naming are one of black American literature's dominant traditions. This raises the question of why this tradition is so important. To gain a better understanding of it, this paper deals with African-American Namelore: it discusses black names from a historical point of view and identifies their hidden meaning.

Unusual black names could be classified into about 10 large groups from the 17th century to the 20th century, on the basis of earlier studies by Puckett and Heller. Some names were means and devices of preserving the memory of one's birthday, birthplace, and so on during the period of slavery when black people were prohibited from literacy. In addition, nicknames reflecting personality and outward appearance were used as permanent names. Most of them were witty, expressing their owners' personality.

African-American authors have emphasized characters' names because of the profound meaning they have in the African-American collective ethnic history. The unique names not only show that the characters seek the freedom to name themselves and reject the names imposed by their masters, but also tell us about episodes in their individual lives. In other words, they have two essences: collective and individual histories. Thus, the unique Afro-American names encapsulate powerful ethnic meanings and strong personalities, and greatly contribute to the realness of the characters in their fiction.